

平成26年8月3日(日)

老球の細道43

ライオンに追われた兎は肉離れしない

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

サッカー・ジャパンの前監督オシムは日本人選手の体調管理の緊張感欠如を揶揄して次のように語ったことがあった。

「自然界では、突然ライオンに追われた兎は肉離れなどしない。自然界の掟は食うか食われるか。いつ、いかなる時どんな危険があるかわからない。そのための備えを常に意識して生きていかなければならない。余裕こいている暇はない」

かつて、日本の戦国時代、武士の時代もそんな状況だったのだろう。戦いが日常茶飯事の時代は毎日が殺すか殺されるか。生き残るためには常に備え万端にしていなければやられてしまう。スポーツの世界に例えると、毎日がウォーミングアップなしの即試合か。

宮本武蔵と佐々木小次郎の巖流島の決闘。赤穂浪士の吉良邸討ち入り。映画やドラマで何度見たかわからないが、一度たりとも彼らが戦う前にウォーミングアップするシーンを見たことがない。時間に遅れて来る武蔵を待つ小次郎がストレッチをやったり、ランニングをしたり、素振りをするなどなかった。船の中で巖流島に向かう武蔵は、舟の櫂を削りながら木刀作っていたが、舟の中で身体が冷えないようにラジオ体操したり、四股を踏んだりするシーンは見たことはない。赤穂浪士たちは寒い雪の中を吉良邸まで向かうのに、チームで馬跳びをしたり、ブラジル体操をしたりして身体を温めたりしていなかった。そんなことを突然しなくても毎日がトレーニングで、朝から寝るまで油断なく、有事に備えた生活をしていただろう。

アスリートもこれに近い生活感覚が必要だろう。ちょっと何かあると、すぐに体調を崩したり、ケガでは自然界や戦国時代であれば殺されてしまう。文武両道などと「武」に例えられるスポーツ選手でそこまで厳しく自分自身を律している者がどれほどいるのだろうか。オシムが惜しむように語っていたことを、同じクロアチア出身のバスケットボール元全日本監督ジュリコ・パブリセビッチ(現和歌山トライアンズ)もかつて言っていた。

「日本の選手は。辛いことがあるとすぐに逃げる。バスケットから逃げても日本の選手は食べていける。生きていける。クロアチアの選手はそうはいかない。バスケットができなくなれば食べる道が閉ざされ、生きていけなくなる。だから、生きるためにバスケットボールと真剣に勝負する」

この平和な日本において生死と背中合わせにトレーニングしているスポーツがある。ライフセービングである。ライフセービングとは、海辺の安全を守るライフセーバーたちが日頃の鍛練の成果を競い合う競技。派手に救助をする、海に飛び出していくことがライフセーバーの誇りではない。目立たない、大半の人が気づかない危険を察知して行動しながら鋭い感覚を養うことがいちばんの目的だという。そのためには、普段の生活でも、真剣さ、緊迫感を持って生きる日常の積み重ねが求められる。

ルールで定めた範囲内で勝負を競うゲームは、生死の境に直面した活動とは比較にならないかもしれない。しかし、バスケットボールもライフセービングのように、常に人間の生死を実感し、日常を烈しく生きるための鍛練とつながっていけばもっと真剣に取り組める。そうなれば、バスケットボールの意義と価値はさらに高まるのではないだろうか。